

ナースコールに対する看護婦の意識

2階西病棟

○穂木 久美・東前 幸・藤田 優子
田中 望・山崎あゆみ・谷脇 文子

I. はじめに

ナースコールの役割について氏家は「コミュニケーションパターンの一つ・患者と看護婦の連絡手段・看護業務を効率良くするもの・患者のニーズを満たすもの・用がある時に呼ぶもの」の5つをあげている¹⁾。しかし、患者中心の看護から、日々のナースコールへの対応についてこれらの役割を考えた時、ナースコールの使用上不適切と思われる内容があり疑問を感じる。

既存の研究では、患者がナースコールをどのように捉えているかは調査されているが、看護婦を対象とした研究は明らかにされていない。そこで、今回私達は、日々のナースコールの使用への疑問を解明する目的で、看護婦が看護の中でナースコールをどのように捉え、意味付けているか、アンケートによる意識調査を行い検討した。

その結果、ナースコールについては患者の欲求、安心感、安全性という面から必要であり、経験年数が高い者ほどその傾向が強くみられた。しかしその反面、ナースコールがなくても患者のニーズを満たせるような看護ができるのではないかとの意見も聞かれた。これらの事から、近森が述べるように「ナースコールには看護の基本が凝縮されている」²⁾という事を支持する結果を得たので報告する。

II. 調査方法・対象

表1 年齢・経験年数別対象者の分類

n=46

経験年数 年齢	1~2	3~5	6~9	10年以上	計
20~25	5	5	0	0	10
26~29	0	0	15	0	15
30代	0	0	5	12	17
40代	0	0	1	3	4
計	5	5	21	15	46

1. 調査対象：当院外科系病棟より
第2外科病棟及び、
産婦人科病棟(周産
母子センターを含
む)に勤務する看護

婦、及び助産婦 46名 (婦長を除く)

対象者の分類：基本属性；経験年数・年齢 (表1)

2. 調査期間：平成10年9月3日～平成10年9月10日
3. 調査方法

1) アンケート調査 自由記述式

2) 調査にあたっては、本研究の目的を説明し、知り得た情報については、本研究以外の目的には使用しない事を説明し同意を得た上で行った。

Ⅲ. 結果

表2 ナースコールの説明の有無

n=46

入院時オリエンテーションの際、患者へのナースコールの説明については、『いつもしている』が全体

説明 経験年数	いつも している	殆どしている	時々して いる	全くして いない	計
1~2	2	1	1	1	5(10%)
3~5	3	1	0	1	5(10%)
6~9	10	5	5	1	21(45%)
10年以上	14	1	0	0	15(32%)
計	29(63%)	8(17.4%)	6(13%)	3(6.5%)	46

の46名中29名(63%)、『殆どしている』が46名中8名(17.4%)であった。又『全くしていない』と答えた者が46名中3名(6.5%)で、それは経験年数が10年目以下の群であった。(表2)

その説明内容について見て

表3 ナースコールの説明内容

(複数回答) n=46

みると、3~5年目は、①場所②使用方法③使用目的・声掛けの順に答えていたのに対し、その他は、①使用方法②使用場所

説明内容 経験年数	使用方法	使用目的	場所	声かけ	実演	計
1~2	4	2	3	3	0	12
3~5	4	3	5	3	0	15
6~9	18	11	15	13	7	64
10年以上	14	10	10	9	4	47
計	40	36	43	25	11	138

③声掛け・使用目的の順であった。又、6年目上の群が『実演』を説明内容の中に取り入れており、経験年数が高い者ほど説明内容の項目が多く認められた。(表3)

ナースコールの持つ役割・機能面については『連絡手段』が全体の23名(50%)、『患者のニードを満たすもの』46名中15名(32.6%)、『用がある時に呼ぶもの』46名中3名(6.5%)、『無回答』46名中5名(10.5%)であった。(表4)

これを経験年数でみた場合、2年目以内は、全員が『患者のニードを満たすもの』をあげていた。3年目以上では、『連絡手段』『患者のニードを満たすもの』の順に答えていた事が特徴的であった。又、いずれの経験年数群においても『コミュニケーションパターンの一つ』は選択されていなかった。次に経験年数別に選んだ理由をみた場合、2年目以下は、安心感を与える、患者の欲求に対応出来るという回答であった。6年目

表4 ナースコールの最重要視の内容

n=46

重要内容 経験年数	コミュニケーション パターン	連絡手段	看護業務を 効率よくする	ニードを満たす	用がある 時呼ぶ	無回答	計
1~2	0	0	0	5	0	0	5(10%)
3~5	0	3	0	3	0	0	5(10%)
6~9	0	11	0	5	3	2	21(45%)
10年以上	0	9	0	3	0	3	15(32%)
計	0	23(50%)	0	15(32%)	3(6%)	5(10%)	46

以上の群では『連絡手段』を選んだ理由の中に、コミュニケーションや患者ニードの充足は患者の側にいればできる、ナースコールを受ける事によりどれだけ患者の側にいられるかの判断ができるという回答があった。又、ナースコールは患者が看護婦を呼ぶ為のものであり、その逆ではない。患者が看護婦の手を最も必要とする時に使用するという回答があった。『患者のニードを満たすもの』の理由には、患者が看護婦に何かをして欲しいと求めている時や、患者は欲求を看護婦に伝える為にナースコールを使用するという回答であった。

ナースコールに対して予測できるかとの質問では、『殆どできる』が全体の 30 名 (65.2%) であり、『時々できる』 46 名中 16 名 (34.8%) であった。(表 5)

経験年数で比較すると、

表 5 ナースコールの予測の有無

n=46

予測 経験年数	いつも できる	殆どできる	時々できる	全くで きない	計
1~2	0	2	3	0	5(10%)
3~5	0	1	4	0	5(10%)
6~9	0	14	7	0	21(45%)
10年以上	0	13	2	0	15(32%)
計	0	30(65.2%)	16(34.8%)	0	46

5 年目までは『時々できる』の割合が 60~80%と高く、6 年目以上の群になると『殆どできる』の割合が 66~86.7%と高い。予

測できる内容は、経験年数による差はなく、点滴・食事・排泄に関するものが多かった。その他にも発熱・鎮痛剤希望・嘔吐の意見があった。予測できなかった内容は、予測できる内容とほぼ同じで、点滴・排泄に関する事が上位を占めていた。それに加え、急変、転倒という急なトラブル等に関しては、予測できないとの意見が全体的に多くあげられていた。これについても経験年数の差は認められなかった。

ナースコールを必要と考えている者は、全体の 44 名 (95.6%)、無回答 46 名中 2 名 (4.4%) と、ほぼ全員がナースコールを必要と答えていた。その理由は、患者の欲求以外に、夜勤帯など人数が限られる状況で、患者の側にいられない時に患者がナースコールを使用する事によって状況を把握できる。それにより患者中心の看護が提供できるという回答があり、患者の欲求、安心感、安全性という意見に分類できた。しかし、必要という意見が多かった反面、経験年数が 10 年目以上では理想としてはナースコールがなくても患者のニードを満たすような看護ができれば良いと考えている者があった。又、看護婦側で予測できるものについては、ナースコールを使用せず行動できるようにしていくべきと答える者もいた。

IV. 考察

今回の調査より以下のことが分かった。第 1 点は、オリエンテーション時の説明の必

要性や内容に対しては、経験年数による差が明らかであったこと。第2点は、ナースコールについて最優先するものが、2年目以内の看護婦はニードを満たすと捉える反面、実際の行動ではオリエンテーション時の説明内容との差がみられたこと。3～5年目はナースコールの役割機能を連絡手段としながらも、その理由の中には、患者ニードを充足させるものとして当然だと答えていたこと。更にベテランナースといわれる10年目以上においては、ナースコールがなくても看護ができるという意見には、看護の本来あるべき姿が反映されているのではないかと考える。これらの事から、看護婦にとって経験を積む事が看護の質の向上につながる事が示唆されたと考える。つまり、看護婦が日々看護を通してどのように成長していくか、看護婦自身の価値観・看護観が大きく関与しているのではないかと考えられる。

第3点として、ナースコールの持つ役割・機能の理由には、ニードを満たすだけでなく患者の安全性・安心感と回答した者が全体に多くみられたこと。この事は、心理面では、ナースコールがなくても看護ができるのではないかと考えながらも、役割面では、患者の安全性からナースコールを必要としていたのではないかと考える。

看護は、看護する人、受ける人、看護する場、ケアという4つの要素から成り立っている。ナースコールを受ける事で生まれる、看護婦と患者との関わりという面から、ナースコールには場とケアとを提供する働きがあるのではないかと感じた。患者の立場からいえば、遠慮や気兼ねという面でのナースコールも、看護婦側では患者中心という肯定的な捉え方をしている事も今回の研究から得られた事である。

ナースコールを鳴らさない看護は過去の研究でも行われ、先取り看護といわれているなかで、意味のある有効的なナースコールの使用でなくてはならない。そうすることで、患者の元へ多くの時間足を運ぶ事ができ、患者とのコミュニケーション、ニードの充足ができるということが今回の調査でも明かであった。以上のことにより、患者のベッドサイドでの看護の質を評価できるものとして、ナースコールが1つの指標となるのではないかと考える。

患者中心の看護は、全ての看護婦が重要視していた点であった。ナースコールが進歩し、機能面での向上が図れたとしても、患者の為にあるべきナースコールという基本的な信念は持ち続けたい。そして、看護の質が凝縮されているものとして、ナースコールを自分のものとし看護に生かしていく事が必要である。

V. まとめ

1. ナースコールは患者にとって必要である。

2. ナースコールの使用では、患者中心の看護を前提（基本）にベッドサイドの看護を充実させなければならない。

VI. おわりに

今回の研究で、改めてナースコールは、患者のためにあるべきものと看護婦が自覚しているとともに、看護の基本が凝縮されていることが再認識された。しかし、データ分析では、調査対象を限定したことにより、看護婦全体として見た場合にはその他の結果が得られたとも考えられる。

今後経験を重ね、看護観を培い、更に一步深く追求した看護に発展させていきたい。

引用・参考文献

- 1) 氏家 幸子：基礎看護技術，第3版第5刷，医学書院，p14 - 20，1993.
- 2) 近森芙美子：ナースコールを考える，看護，31（11），p5 - 17，1979.
- 3) 川島みどり：日常ケアを見直そう ―あなたの職場の看護チェック，第1版第8刷，医学書院，p18 - 25，1997.
- 4) 池田 明子：看護理論とその実践への展開，金原出版株式会社，p36 - 41，1994.
- 5) 阿部範子：ナースコールが鳴るとき，看護31（11），p18 - 28，1979.
- 6) 菊池一久：患者にとってナースコールとは，看護31（11），p40 - 43，1979.
- 7) 兼子清子他：ナースコールをとおしてみた患者のニード，看護31（11），p29 - 39，1979.
- 8) 小川弥生他：ナースコールの使い方は適正か，ナースステーション，19（9），p52 - 57，1989.
- 9) 武川妙子他：ナースコールの内容分析と今後の方向性，山梨医科大学附属病院研究抄録集，p351 - 356，1993.
- 10) 川下まさ子他：ナースコール使用の実際，高知医科大学医学部附属病院看護部看護研究集録，第2号，p141 - 147，1984.